

前回のコラムで「場違い」という言葉を紹介しました。場違いと言え、一般的にはその場にふさわしくない言動を指します。異文化への嫌悪感も似た仕組みが働きます。私が授業で示す例のひとつは靴です。授業をしている自分を指して学生に「私を気持ち悪いと思う人はいますか」と聞きます。うるさい先生なので嫌っている学生はいるとは思いますが、「気持ち悪い」

とは思わないようです。そこで、片方の靴を脱いでその靴を机や自分の頭に乘せようとすると、多くの学生が「汚い」、つまり、気持ち悪いと感ずます。

土などが付いている靴を机や頭に置くのですから、それは当然だろうと思うかもしれません。ではケーキはどうでしょうか。先ほどまで皿の上であり、食べていたケーキが床や服につくと「汚い」と思ひ、食べてはいけなひものになります。床などについた部分だけ取り除き、「食べても衛生的には良いのでは」と思ひますが、あまりそうする人は見かけません。キャンプの時に土に落ちた白いご飯も同じですね。つまり、衛生の問題ではないのです。ケーキは皿の上に、靴は足のところにあるべきものなのです。あるべきところにないと人はそれに単に汚い以上の嫌悪を感ずるのです。



このようなあり方をアメリカの人類学者メアリー・ダグラスは「out of place(場違い)」と言ひました。場所だけではありません。私たちが食べ物ではないと考えるもの(例えば、ネズミ)を食べるのを見ると、「気持ち悪い」と思ひのも一緒です。食べ物と非食べ物(ルール)の違反なのです。そのルールに絶対的正しい理由がなくても、区別を乱すことは「気持ち悪い」対象なのです。

文: 県立広島大学 上水流久彦 講師

イラスト: 県立広島大学 ロナルド・スチュワート 准教授

2013(平成 25)年 広報あきたかた 11 月号掲載